都市文化研究　Studies in Urban Cultures
Vol. 10, pp. 67-80頁，2008

◇ 研究ノート ◇

1980年代韓国ソウルにおける文化空間の意味をめぐる葛藤

―― 大学路「車のない道」を事例に ――

水谷　清佳

◆要　旨

本稿では，1980年代に韓国ソウル大学路で行なわれた「車のない道」の開放から閉鎖までの利用実態を明らかにし，ソウルの人々がどのように文化空間を享受し，意味づけをしていったのかを新聞記事と語りを資料に分析する。そして1980年代におけるソウルの文化空間はどのようなものであるのかを検討する。

「車のない道」には中・高校生，大学生，青年などが訪れていた。また，演劇人や大学路周辺住民らも「車のない道」に様々な考えを持っていた。その結果，「車のない道」に対するソウルの人々の意見には，多様かつ一定の乖離がみられることが明らかになった。その争点となったのは高級・文化的な雰囲気を持ったかつての「大学路」への愛着であった。

1980年代のソウル市における文化空間は，行政とソウル市民という対極の間に存在し，行政対ソウル市民，市民の間でも社会階層間で空間への意味づけをめぐって葛藤が生じていたことがわかった。

キーワード：ソウル市大学路，文化空間，1980年代，「車のない道」，葛藤

（2007年10月1日論文受理，2007年11月16日採録決定　『都市文化研究』編集委員会）

1. はじめに

近年韓国ソウルでは「市民[1]のための空間」，「文化空間」という言葉が飛び交い，週末になると様々な場所で趣向を凝らしたイベントが催されている。ソウル市は「ビジョンソウル2006―ソウル市政4カ年計画」において「人中心の便利なソウル」を目標に掲げ，2005年までに都心に3か所の広場を形成する[2]計画のひとつとして，ソウル市庁前広場を誕生させた。しかし，市民の自発性，自由の促進とコミュニケーションを誘発させる開かれた場としての機能を持つべきはずの広場は，単純な文化・芸術の公演場になっていると指摘されている[3]。そしてソウル市主催の多様な文化プログラムが，広場の利用者たちを消極的な‘観覧客’として誘導しているのだという[4]。

一方仁寺洞[5]では毎週末，商店街を車両通行禁止にする「車のない道」[6]が行われている。「車のない道」は常に開かれているわけではなく，開放時間などが限定されているものの，車道を自由に利用できるという広場とは違う開放感を味わうことができる。チェジヨン・キルヨンヒョン[7]らは仁寺洞の「車のない道」を出会い，対話，見学ができ，市民参加可能なプログラムによる社会的交流ができる場所だと分析している。例えば伝統的な衣装を身に着けた人々のパレードや伝統工芸品の製作などがそれに当たるが，ソウルの人々は開かれたプログラムに参加するのみで，彼らの自発的な活動をみることはできない。現在のソウルにおいて，広場や「車のない道」は市民にとって休息，散策，待ち合わせなどの与えられたプログラムを受け入れるだけの非自発的な空間になっているようである。しかし上述したソウルの空間の中でも，大学路は他の地域と一線を画している。

大学路とは飲食店や小劇場が密集する“若者と芸術のまち”の中心をはしる幹線道路のことで，恵化洞ロータリーから梨花洞ロータリーまでの1.1キロメートル，6車線，幅30メートルの区間のことを指す。またこの道路周辺の商業施設などを含めた一帯も大学路と呼ぶが，大学路という正式な地名は存在しない[8]。大学路に隣接するマロニエ公園では自発的に青少年たちのダンスや公演が行なわれ，週末には野外舞台でプロ・アマを問わずコンサートが開催されている。

このように，大学路は他の地域には見ることのできない自発的な活動をすることのできる空間である。そこで大学路が形成された時期を振り返り，大学路の利用実態を明らかにしながら，人々がどのように与えられた空間を享受し，またその中でどのようなやり取りがあり，自分たちの空間を形成していったのかを分析する。そして，1980年代のソウルの文化空間はどのような空間であったのかを検討する。

2. 1985年までの韓国及び ソウル市における文化状況

本章では，大学路の「車のない道」が開放されるまでの，1985年以前の韓国の政治情勢を含む社会状況を簡単に説明する。また，同じく1985年以前のソウル市による文化空間の形成状況を概観する。

2-1　1985年までの韓国社会と文化状況

1970年，政府は「セマウル運動」によって農民の意識涵養を目指したが，農村社会からの脱皮を図るあまりに，伝統的な風俗を否定する傾向が強まった。農村では民俗文化の衰退が加速度を増す反面，都市では伝統文化が注目された。

1971年，朴正熙大統領は「文化芸術振興のための長期発展計画」を策定し，翌年「先代から譲り受けた文化的遺産と伝統芸術を継承発展させ，民族思想と主体意識を育て，新しい民族文化を創造しなければならない」と宣言した。これに応じるかたちで政府は文芸中興，中・長期計画の策定に加えて，同年「文化芸術振興法」を制定した。同法に基づき1973年に，特殊法人「韓国文化芸術振興院」（以下，文芸振興院）が設立された。文芸振興院は伝統文化の継承発展と文化芸術の研究，創作，募金活動を支援し，文芸中興を成し遂げることを設立目的としており，政府の文化政策の提案を受けて計画・運営を担う立場にある。文化振興を推進する一方で政府は，各大学への休校令，マスコミの事前検閲，非常戒厳令を布達した。

同時期に，文化人や芸術界の中でも韓国文化に関して活発な討議がなされていた。これまで無批判に受け入れられてきた西欧文化に対する反省や，大衆文化，テレビメディアについて議論され，韓国の文化芸術のアイデンティティが問題視された。伝統文化をどう継承するか，世界に韓国文化をどう表現・発信するかが議論され，それが後の「80年代の新文化芸術政策」に引き継がれることとなった[9]。これは朴正熙大統領の唱えた「主体性確立」という政治的理念を基盤にしていると考えられ，伝統文化や韓国的なものに目を向けることによって「民族的主体性の回復」を行なおうとしたのである[10]。一方，大学生や民衆の間ではこの伝統文化の見直しが独裁政権に異議申し立てをする大学文化に組み込まれ，「マダン劇」などを生む契機にもなった（車，1996）。

1979年，朴正熙大統領が射殺され，1980年代に入ると民主化を要求する学生運動が再燃した。5月には45大学の学生10万人によるデモが行なわれ，ソウルでは7万人の学生が重要施設を占拠し，光州でも大規模な学生運動が起こった。光州学生運動によって，崔圭夏から権力を奪取した全斗煥が大統領に就任した。全斗煥大統領は1981年に「80年代の新文化芸術政策」を発表した。これは国政指標のひとつである「文化芸術暢達のための基本方向」を策定するもので，国民精神の支柱を定めることに趣旨があった。具体的な計画としては予算確保，中央優遇政策からの脱皮，文化芸術の主導権の民間移譲などである。政府は憲法史上初めて「国家は伝統文化の継承発展と民族文化の暢達に努力しなければならない」（第八条）と規定し，同年ソウルオリンピックの開催が決定したことも伴って，ますます文化政策に本腰を入れるようになっていった。1980年代の文化政策のメカニズムは，「意図的抑圧」と「体系的排除」に要約でき，多様な方法で文化の抑制を図る一方，意図的に育成するというものである。そこで意識操作のために，大規模な文化行事が頻繁に開催された[11]。そのひとつとして1981年に開催された「国風81」がある。「国風81」とは汝矣島の国会議事堂前5.16広場で開かれた民俗芸能を中心とした祭典である。政府はこの祭典で，学生の欲求不満を解消させることで学生運動の沈静化を企てたが，失敗に終わった。

2-2　1985年以前のソウル市における 行政主体の文化空間

表1は1985年大学路に「車のない道」が開放されるまでに，行政によって形成された文化空間の状況をまとめたものである。ソウル市によれば韓国における文化空間は，公演施設（総合公演場，小公演場等），展示施設（美術館，展示場，博物館等）に分類され，図書館，大学なども含まれる。**表1**では，公演施設及び展示施設と大規模公園，大規模図書館のみを記述した。

表1をみると，1981年を境に文化空間の形成が活発化していることがわかる。1981年以前には国立劇場が誕生したものの，宮殿や城郭など歴史的建築物の補修が目立つ。これは日本による植民地時代に失われた空間を取り戻す作業を行っているのだと考えられる。一方，1980年代に入ると体育館や野外の文化空間の形成が目立ち始める。1981年には「80年代の新文化芸術政策」が制定され，本格的な文化政策のもとに文化空間が形成され始めていることがわかる。

表1　1985年までの行政主体文化空間状況

年代	行政主体文化空間	文化空間関連事項
1950	国立劇場	
1955	国立博物館，徳寿宮石造殿に移転	
	ソウル運動場野球場開場	
1960	徳寿宮，昌徳宮の公開観覧禁止	
	円覚社焼失	
1961	景福宮，昌徳宮公開	遊技場許可当分中止
	ソウル市民会館開館	
1962	住宅地帯のソウル城郭6100m文化財指定	
1963	市立南山野外音楽堂建立竣工	
1964	東大門室内スケート場開場	政府，重要無形文化財指定
	ソウル運動場水泳場開場	
1966	景福宮民俗館開館	
1967	パゴダ公園重修竣工	
1968	世宗路に李舜臣銅像除幕	
	文化広報部からソウル市内重要文化財管理権入手	
	光化門復元	
	南山植物園開院	
1969	ソウル運動場内市民体育センター開館	
1970	世宗大王記念館竣工	
1971	汝矣島飛行場閉鎖	
	汝矣島広場完工	
1972	景福宮内国立中央博物館新庁舎開館	59の街路に新街路名命名
	ソウル市民会館焼失	
1973	子供会館竣工	青いソウル4か年計画発表
	国立劇場開館，大劇場1494席，小劇場344席	58の街路名確定
		韓国文芸振興院開院
1974	ミニ公園21か所設置	
1975	ソウル大学校，冠岳キャンパスに移転	
	光熙門復元工事竣工	
1976	東廟公園開放	蚕室運動場をソウル運動場に，ソウル運動場を中部運動場に改称
	風納里土城復元工事一部竣工	一部街路名変更
1977	光熙地区城郭復元工事完工	市庁別館に総合観光案内所開館
	文廟補修工事完工	公演場監督業務をソウル市から区庁に移管
1978	地方文化財26点の周辺5-50m地域を文化財保護区域として指定告示	
1979	明洞「車のない道」開放　土曜日午後2時～日曜夜12時　車両前面禁止	青い街路造成計画樹立
	チョンウン（청운）2地区都城復元工事完工	11の街路名制定発表
1980	独立門移転工事竣工	公園条例一部改定　65歳以上老人の公園入場料免除，有料公園の施設使用料100％まで引き上げ
	南山野外音楽堂撤去開始	無許可ゲームセンター千か所営業確認
	三成地区都城復元工事完工	
1981	文化観光部，韓国の家開館	名前のない道路36か所に道路名制定
	文芸振興院，文芸会館（旧ソウル大跡地）開館　美術会館，大劇場・小劇場など具備	重要無形文化財ソウル伝授館竣工
	汝矣島広場，毎週末「車のない道」開放　毎週土・日車両通行禁止	
	東崇地区城郭復元工事竣工	
	漢江市民体育公園7か所竣工	
	国立図書館本館開館	
	文化観光部，延世大学校スチームスホールなど12の建物を史跡指定	
	蚕室体育公園開場	
	蚕室湖公園造成	
1982	ソウル総合運動場野球場開場	
	ソウル城郭東崇地区重修工事竣工	
1983	昌慶園動物園をソウル大公園に移転	鐘路，太平路街路など施設工事完工
	南山を週末散策指定，土日祝日南山循環道路全面統制	
	子供交通公園開園	
	交通会館開館	
1984	タプコル公園拡張工事完工	文化観光部，伝統家屋64か所民俗資料として指定
	ソウル大公園開園	
	嘉会洞など10か所の洞の韓屋保存地区を都市計画地域として指定	
	ソウルノリマダン竣工	
1985	普信閣鐘保存決定	
	ソウル大公園温室植物園開園	
	大学路を文化芸術の道として造成開放，土曜18～22時，日曜祝日12～22時まで車両通行禁止	

出拠：『ソウル六百年史』ソウル市史編纂委員会2006をもとに執筆者作成

3. 大学路の概略

以上，大学路「車のない道」が開放される1985年以前の韓国の文化状況とソウルの文化空間を明らかにしてきた。ここでは「車のない道」が開放される以前の大学路の様子を捉え，大学路のイメージを検討する。

3-1　大学路の略史

1929年に京城帝国大学（1945年に国立ソウル大学校へ名称を変更）が大学路のある東崇洞に開学した。1972年には，国立大学校に放送通信大学を設置する教育法（第一四四条二項）に基づき，韓国放送通信大学が開学した。

ソウル大は1975年，学生デモの温床だとして[12]，医科大学のみを残して同年から約4年間をかけてキャンパスを移転することになる。その後，1976年に文芸振興院が旧ソウル大の本部を文芸振興院の本部として使用し，文理大があった場所にマロニエ公園を開園した。公園の名前の由来は，旧ソウル大に植えられていたマロニエの木を大学跡地の象徴として残したからだという。1979年にはマロニエ公園周辺に文化会館，美術会館が建設された。1981年になると文芸会館が設立され，1983年には文芸振興院がソウル市からマロニエ公園の使用権を受けた。1984年9月にソウル市内の街路名変更の際，市民からの意見を取り入れ，ソウル大があった場所を記念して幹線道路を「大学路」と正式に名付けたという。

3-2　「車のない道」開放以前の大学路

それでは，「車のない道」が開放される直前の大学路はソウルの人々にとってどのようにとらえられ，表現されてきたのだろうか。本節では，新聞記事と語りを資料に明らかにする。

東崇洞一帯はマロニエや銀杏などの街路樹が植わる道で，「マロニエの道」や「文化の道」と呼ばれてきた。1980年代初頭の大学路は，旧ソウル大があった「由緒正しい場所」（「朝鮮日報」81/9/26）で，文人・芸術人・教授たちが集う「文化的な」（「中央日報」83/8/30）環境と表現されてきた。

「朝鮮日報」1981年9月26日の一節に，「韓国文化の中心」と称された大学路の“ある秋の一日”が紹介されている。「マロニエと銀杏の葉が覆う，赤いレンガ造りの建物に出会う。マロニエ広場を中心に正面に美術会館が左側に文芸劇場が位置している。建築家金壽根氏の作品のように外観から芸術的雰囲気が漂う」という記述からは，如何にも大学路が芸術的な雰囲気を持つ場所であることが表現されている。さらに大学路は「ごみごみした日常から少し抜け出て芸術と出会う休日を楽しむ」ことのできる非日常的な空間であることも表現されている。

「中央日報」1983年8月30日は大学路周辺の飲食店を訪れる客の「80～90％が大学生階層人」や「大部分が教授・文人・画家たち」だと述べている。骨董品店主はインタビューに答え，「東崇洞の静かで知性的な地域の雰囲気に惹かれて」店を構え，「お客様の大多数が教授・画家など上品な方たち」であると語っている。また「中央日報」1985年4月21日は，「この地域に文化芸術振興院・小劇場・展示場・美術館など各種文化芸術団体と品位ある飲食店・飲み屋などがある」ことを紹介している。これらの記事から大学路には上品な店が軒を連ね，知的で高級な雰囲気が漂っていたことを読み取ることができる。

聞き取り調査からも，同様の語りを聞くことができた。以下は，当時梨花女子大学生であった方（**表4H**）の語りである。

> 84，5年の大学路は雨の日に似合う場所として女子大生に人気だった。〈「ナンダラン」という喫茶店は〉一階と二階が全てガラス張りになっていて，雨が降ると雨のしずくが落ちるのがきれいだった。コーヒーとジュースのある普通の喫茶店で，ソウル大があった頃の銀杏の木が植わっていて，静かな所でデートコースだった。（2003/6/20）

また聞き取り対象者は大学路の様子を語る際に，しばしば「しっとりとした落ち着きのある場所」という表現をしていた。「雨の日に似合う」や「静かなデートコース」という語りからも，大学路は女子大学生に好まれる上品な雰囲気を持った場所であったことが窺えよう。

以上から，大学路は知的で品位のある知識人たちの集まる場所だと表現されることが多く，またソウルの人々にもそう理解されていたことが読み取れる。しかし，キムチャンナム[13]は，1980年代中盤になると商業主義に押されてソウルからは「高級文化」の領域が淘汰され始めると指摘している。同時期に大学路も江北地域[14]における大衆消費文化の集結地[15]となってゆく。

4. 大学路「車のない道」と政策

4-1　「車のない道」開放目的

1981年に発表された「80年代の新文化芸術政策」によって国家的な文化政策が行なわれている中で，ソウル市の文化政策も問題視され始めた。ソウル市はその一環として芸術文化施設を建設したが，一般市民が自由に利用することのできる文化空間の必要性を充分理解していなかったようだ。マスコミからは市民のための適切な文化空間の確保と文化プログラムの開発など，市民の文化水準向上のための環境を整備する必要性がしばしば訴えられた。さらにマスコミはソウルの道の環境についても論

評し始めた。例えば「ソウルの道は非文化的で殺風景で，道の文化が期待できない」[16]など否定的なコメントがみられた。そこでソウル市はソウル市民からの要求を受け入れ，文化的な場所と環境の必要性[17]を提唱し，文化的な空間のひとつとして「道」に関心を払うようになった。アジア大会とソウルオリンピック開催の決定と相俟ち，ソウル市の都心部の緑化推進や，ソウル市内249ヶ所の街路と16ヶ所の漢江橋の名称のハングル化など「道」の環境整備は加速していった。

文芸振興院では1984年初頭から，大学路をソウルの名所にする計画を推進してきた。「ロンドンのピカデリー，ニューヨークのブロードウェイ，東京の原宿，パリのモンパルナスやモンマルトルと同じ名所がソウルにも必要」（「朝鮮日報」84/9/19）だという考えのもとに，大学路を「車のない道」として開放することが計画され始めた。

青少年対策委員会によれば1980年代は，社会全般に青少年文化に対する関心が向上した時代でもある。文芸振興院は，1985年度の「文芸振興基金主要事業計画」のうち「青少年文化の振作」を重要推進法案のひとつとしている[18]。この法案では，健全な青少年を育成するための良質な文化の配給，青少年の自律的な参与の拡散と文化活動指導者の育成，青少年文化施設の造成を掲げた。さらに1985年は「国際青少年の年」にあたるため，「車のない道」の計画は青少年のための文化空間を造成する目的も含んでいた。

ソウル市文化課は交通統制，清掃，公演などの申告受付など「車のない道」の運営全般を引き受け[19]，大学路を文化芸術の道として整備するために21億ウォンを拠出し，道路整備，街路樹の植樹，マロニエ公園内には野外舞台，彫刻品，ベンチ，水飲み台の設置などを行なった。道路整備に関しては，車道を25メートルから40メートルに拡幅し，歩道幅も4メートルから10メートルに拡幅した。またマロニエ公園前500メートルを有色アスファルトで舗装する（「朝鮮日報」85/5/2）など，「車のない道」開放に向けて準備は進んでいった。

文芸振興院は大学路周辺の住民や店舗関係者から「積極的な賛成」（「朝鮮日報」84/9/19）を得ており，若者たちの文化的要求の発散と機会提供の場所として「東崇洞の道は最適」だという声も寄せられている。一方政府は，「今まで青少年の文化環境助成に特別な業績を出せなかった反省の側面や，国の高級文化を形成する支えとして」（「中央日報」84/2/8）「車のない道」の開放に期待を持っているようである。

以上のように，大学路は政府やソウル市民たちにとって，「車のない道」を開放するに相応しい場所としてとらえられていたようだ。

4-2 「車のない道」での芸術文化活動

ソウル市は「車のない道」開放の目的を「都市の過密化に伴い，市民と青少年のための安息所が不足し，社会全般に劣等文化と低級芸術が膨れ上がる現時点で，市民大衆がいつでも自由に見て聞いて楽しむ健全な文化芸術空間が切実に必要なのに伴い，大学路とその周辺一帯を芸術と浪漫の“風流マダン（마당）[20]”として造成し，健全な余暇専用の場所を計画し文化市民の人格涵養を図る」[21]としている。

表2，**表3**はソウル特別市発行の『'85.5大学路“風流マダン”街路芸術祭計画』に記された「車のない道」で芸術活動を行なう際の「活動要領」をまとめたものである。この活動要領は団体などが公演や展示を行なう場合に適応されるもので，市民が個人的に自由な活動を行なう場合は**表3**の「市民たちの厳守事項」が適応される。**表2**の1，2，3からわかるように「車のない道」での芸術活動は「純粋であり情緒的」で「教育的」でなければならず，「美風良俗を害したり社会秩序に反する内容」を含むものを禁止している。

ソウル市が推進している芸術活動として公演，展示，

表2　芸術活動要領

1	各種芸術行事は純粋であり情緒的な行為で特定集団員や階層を風刺したり非難する行為は一切できず，特に集会場として活用することはできない。
2	公演行事と文芸活動は必ず事前に芸術行事参与申請書に基づいて同意を受けなければならず，美術など展示はその内容が純粋なものであれば展示することができる。
3	芸術行事内容は美風良俗を害したり社会秩序に反する内容を包含し，公演法その他関係法規に抵触される行為をしてはならず，逆に青少年を先導し市民に教育的な芸術行事を勧奨する。
4	各種芸術活動は指定された行事の場所でのみ行わなければならず，他区域を侵犯したり妨害してはならず，特に既得権，占有権など他如何なる権利も主張することができない。
5	芸術行事に参与する者は行事に伴う準備物（例：展示台など）は各自が準備しなければならず，行事後には片付け，場所を空けなければならない。
6	上記の遵守事項を違法する者は如何なる時も退去要求をすることができ，関係法規に依拠処罰することができる。

出拠：ソウル特別市『'85.5大学路“風流マダン”街路芸術祭計画』発行年不明

表3　市民たちの遵守事項

1	行事参与する全ての市民は秩序を持ち他人に迷惑をかける行為をしてはならない。
2	全ての施設物は公共施設物としてお互い大切に毀損しないように注意しなければならない。
3	各種物品はどこにでも投棄したり放置しないように注意し綺麗にしなければならない。

出拠：ソウル特別市『'85.5大学路“風流マダン”街路芸術祭計画』発行年不明

文芸活動がある。公演についてはバンド，農楽，民俗，舞踊，リズムジャズ，無言劇，パントマイムなど広場で行なうことのできるもの，展示には絵画，彫刻，切手，書籍，写真，建築，陶磁器，工芸品，図書など展示可能なもの，文芸活動としては詩朗誦会，作文，写生大会，雄弁などの活動が挙げられており，これらがソウル市が奨励する健全な文化芸術なのである。

5.「車のない道」利用者の構成と各利用方法

1985年5月4日から大学路で「車のない道」行事が実施された。これは土曜日18:00～22:00，日曜祝日は12:00～22:00の間，大学路の700m区間の車両通行を禁止し，文化芸術を楽しむためにソウル市民に開放するというものである[22]。5月4日は行事の前夜祭としてソウル市が企画したイベントが数多く行なわれ，5月5日の子どもの日から本格的に市民に開放された。

本章では，**表4**に示す聞き取り対象者23名（「車のない道」を経験していなくても当時の様子を知っている者も含む。年齢構成は全員30代以上，男女比は男性21名，女性2名）の語りと新聞記事を中心に，ソウルの人々や利用者が「車のない道」をどのように利用し享受していったのかを明らかにする。「車のない道」は中学生，高校生，大学生，若者，市民，パフォーマー，観光客，デモ関係者などが利用していたようだ[23]。その中心は中学生から30代くらいの若者で，歌，演劇，絵描き，ダンスや風物[24]，仮面劇などのパフォーマンスを行なっていたという。そこで新聞調査の結果と聞き取り対象者の「車のない道」開放当時の属性を踏まえ，「車のない道」の利用者の中心となり，「車のない道」に対して様々な影響を与えていたとされる高校生，大学生，その他青年，そして大学路を生活場所とする演劇人，周辺住民に分類し考察を行なう[25]。「その他青年」とは勤労青年，フリーター，高校卒業後の進路が明らかにされていない者を含む。今回は，前掲の属性のどれにも属さない人々に対して調査を行なうことができなかった。その部分は新聞記事の読者ページなどで補いたい。

表4　「車のない道」利用者・周辺住民一覧（2003年現在）

	性別	1980年代後半当時の属性	2003年現在の年齢	2003年現在の属性
A	男性	高校卒業	37	テレビの前座，レクリエーション指導
B	男性	勤労青年	41	土木業
C	男性	不明	39	無職
D	男性	高校生	34	ホームレス
E	男性	高校卒業	30代	無職
F	男性	高校卒業	30代	露天商
G	男性	露天商	年齢不詳	露天商
H	女性	大学生	38	ラジオ局勤務，大学院生
I	男性	大学生	39	家電自営業
J	男性	勤労青年	30代後半	引越し業
K	男性	フリーター	37	家電会社店長
L	男性	高校生	31	エンジニア
M	男性	演劇俳優	年齢不詳	演劇俳優
N	男性	大学生	37	家電会社
O	男性	兵役中	30代	公務員
P	男性	演劇関係者	30代	演劇脚本家
Q	男性	演劇関係者	35	演劇関係者
R	男性	演劇関係者	年齢不詳	演劇関係者
S	男性	高校生	30	百貨店販売員
T	男性	高校生	30代	演出家
U	男性	教会事務員	年齢不詳	教会事務員
V	女性	周辺住民	年齢不詳	カフェ店長
W	男性	不動産屋	年齢不詳	不動産屋

聞き取り調査をもとに筆者作成

5-1　高校生

聞き取りによると「車のない道」には最初は大学生や若者が遊びに来ていたが，次第に高校生が増え，いつしか高校生の集合場所となっていったという。**表5**の5.2「週末ごとに大学路に集まる人波の大半が中高校生」，5.4の「細かく見ると3分の2が中・高校生」という記事からも「車のない道」には高校生とみられる多くの少年たちが集まっていたことがわかる。また，1980年代の後半にマイケルジャクソンの踊りが流行し，その真似をして「ブレイクダンス」を踊る少年たちもいたという。その様子は5.1，5.4からも窺知できる。

次の引用は，当時高校生だったSが大学路で遊んだ経験を語ったものである。Sの語り口や，一緒に聞き取りを行なったSの高校時代の先輩の話から，高校時代のSは模範生とは呼べない少年だったようだ。

> 高校生の時だったよ。皆で輪になって酒を飲んでた。遊ぶ所がなかったから。高校生が沢山いて，輪になってグループになって飲んでましたね。最近はなくなったけど，目が合うと喧嘩するんだよ。（S03/8/10）

「車のない道」では中・高校生など未成年者が仲間同士で円陣を組みながら酒を飲んでおり，酒気帯びによる喧嘩も耐えなかったようだ。Sの当時の立場を考慮しても「車のない道」に遊びに来る未成年者の一部には，このような行為に耽っている者がいたのである。Sからも「遊ぶところがなかったから」という語りを聞くことができた。高校生にとっても遊び場の確保は重要なことであったようだ。しかし一方で，高校生たちによる行動が大学路の悪いイメージを作り出していく要因のひとつと

表5 「車のない道」を利用する高校生に関する新聞抜粋記事

5.1	（「車のない道」報道写真下の説明文） 二回目の車のない道で開放された大学路で男女高校生たちがブレイクダンスを踊り，若者を楽しませている。しかし一部青少年たちが深夜酒に酔い喧嘩をしてめまいを起こしたこともあった。（「中央日報」1985年5月13日）
5.2	『「大学路は‘乱場場広場’」徹夜で放歌・一部十代半裸観覧・そこらじゅう汚物の悪臭‘我々の意識水準はこの程度なのか’市民たち慨嘆』 （前略）文芸振興院の警備員李斎根氏は「大学路を市民のために開放することは歓迎することだが，若者たちと中高校生まで酒を飲むという良くない姿を見ると「文化の道」ではなく「酔っ払いの道」になるのではという心配がある」と述べた。（中略）週末になれば夜10時まで開校している放送通信大学は，大学路の騒音のせいで講義がうまく進まないとした。会社に通いながら放送通信大に在学する李能求氏は「スピーカーの音などの騒音のため，最近のように暑い日にも窓を閉めて講義を受けるしかない」とした。住民たちは住居環境に悪い影響を与えることも問題だが，小さい子供たちの模範とならないことが心配される。6歳になる息子を持つ閔恵基氏は「前は子供を連れて散歩をしたけど，最近は土曜日も日曜日も家でじっとしているしかない」と述べた。（中略）彼らはまた「毎週末大学路に集まる人波の大半が中高校生であることを考慮すると，現在の大学路の運営をそのまま続ければ青少年文化にも深刻な悪影響を及ぼす」と指摘した。（「朝鮮日報」1985年5月16日　一部抜粋）
5.3	読者ページ「酔っ払い10代男女」「大学路で乱場場」 先日土曜日の夜久しぶりにソウル東崇洞大学路に行った。車両通行が中断された道の所々で農楽と仮面劇が行われており，さわやかな歌声が聞こえてきた。好奇心にあちこち傾く道だ。不憫に思う場面に出くわした。高校1～2年生くらいの男女学生たちが座って聴くに聴けない低俗な歌詞の歌を熱唱しているのだろうか。男子学生の前に濁り酒と焼酎瓶が堂々と置いてあった。このような姿を見て来たという友達の言葉を聞いてさらに驚かずにはいられなかった。恥ずかしい顔で低俗な歌を気安く歌う幼い学生たち。このように若者がぐれていくのか。（「中央日報」1986年7月28日）
5.4	『若い市民たち　彼らの楽しむ名所の文化をたどる 踊りと歌と蜜語の中の青春が“うねる”週末文化満開…祝祭の夜　農楽・エアロビックダンスなど　時空超越　若者満喫　大学路　ソウル東崇洞』 夜8時。大学路にはいつしか2万余名の青春たちで溢れる。細かく見ると3分の2が中・高校生だ。大学生たちはぎこちない顔色であちこちに広がるハプニングを覗き込む。一群の少年たちがブレイクダンスを踊る。『ビデオ見て習いました。』『他の人たちを見て浮かれます。』『あそこの高校のお兄さんは上手に踊るでしょう？僕もああやって踊りたい…。』ピンクの頭に口髭が出はじめる少年たちが『チック』タバコの火をつける。大学生たちの姿も見える。10余名の若者たちが興社団前の道路で流行歌を歌いながら濁り酒パーティをしていた。（「中央日報」1986年10月16日）

なっていく。以下はIによる語りの引用である。

大学路は怖いところだと言われていたよ。オートバイで走っている人もいたし。大学路で遊んで，徹夜で酒を飲んで，ソウル大の病院の休憩室で寝てたんだ。そしたら，警備のおじさんが来て，「家出したんだろ」って懐中電灯を照らしてきたんだよ。軍隊も行って帰ってきたのに，私は幼く見えるから高校生に間違えられたんだよ。（中略）あの時代は抑圧されていたんだよ。（中略）そんな時代だったから，そこに大学路が作られたから，お兄さんたちがしていることをしてみたいと思って，無秩序になったんだろう。（I03/7/27）

Iによれば，大学路には怖いというイメージが付与されていたようである。飲酒や喧嘩，「車のない道」終了後に現れる暴走族がそれである。また警備員の言葉から，大学路には家出をした未成年者も集まってきていたことが考えられる。そして「お兄さんたちがしていることをしてみたい」や，5.4のブレイクダンスを踊る少年の発言から少年たちが上級生の姿に影響を受けていることがわかる。それには良いものもあれば，悪いものもある。悪い影響とは飲酒，喫煙，喧嘩などで語りの中の「無秩序」という語彙がそれを表していると言えよう。

次の引用は，あえて大学路に行かなかった当時の高校生Lによる語りである。

その当時は高校生だったから行ってないですね。ソウルに住んでいなかったから。でも，大学路に行って喧嘩して帰って来たっていう話はよく聞きましたけどね。（L03/8/1）

Sのように「車のない道」で騒いだという思い出を持つ高校生がいる一方で，Lは「高校生だったから」行かなかったと言う。Lはソウルに住んでいなかったと語っているが，自宅はソウル市の郊外で大学路を訪れることは困難ではない。仲間からの話を聞いてLは当時の大学路を「あまり良いイメージではない」と考えていたという。Lは学校の仲間から話を聞き，トラブル回避のために大学路を訪れなかったと考えられる。

以上から高校生にとって「車のない道」は，男女共にダンスや歌を歌うことのできる自由な空間であった。しかし一部の学生の飲酒，喫煙，喧嘩という行為から「車のない道」のイメージが否定的にとらえられるようになった。そのため，同じ高校生であっても「車のない道」を訪れない者もいた。とりわけ未成年の飲酒，喫煙，喧嘩といった問題は，「車のない道」の開場10日以降から新聞で「狂乱の道」[26]，「乱場場」[27]，「脱線風流」[28]などと否定的に報道されるようになる。そして後にこれらの問題は「車のない道」が廃止される大きな原因のひとつとなる。

5-2　大学生

当時大学生だったIからも「車のない道」で遊んだという語りを聞くことができた。Iは特に積極的に政治的

な活動をしたことのない，ごく一般的な大学生だった。「車のない道」では友人と酒を飲みながらギターを弾き，歌っていたという。以下はIによる語りである。

> 大学路は，夜まで酒を飲んで遊んでいても怒られない場所だったんだ。ソウルには行く所がない，夜行くところがないんだよ。明洞も夜遅くになれば店は閉まるしね。大学路では合コンもしたな。公園で集まって酒を飲んでいたら，すぐ警察に捕まるけど，大学路はそうじゃない。（I03/7/27）

> 政治や家庭でも抑圧されていた。この時代はお腹が空いてたんだ。この時代は友達と話す場所さえなかった。それでこのままではいけないと，政府が若者が遊べる場所を与えたんだ。私の考えでは，地下室で警察を殴った話とか，大学路で会議をしたりとか（今までなら）隠れてすることを大っぴらに話したりするから逆に大学路は良かったと思う。（I03/7/27）

この引用文には二つの重要な点がある。まず，大学生だったIにとって1980年代のソウルには夜中に遊びに行けるところがなかったという点である。公園で酒を飲むという本来ならば警察に捕まる行為も「車のない道」では放任されていたようだ。聞き取りによれば，当時の「酒を飲む」行為は世相の批判や仲間同士で意見を交わす際の，コミュニケーション手段のひとつであったという。Iにとって「車のない道」は，政治による社会の「抑圧」から解放される場所であったようだ。それは**表6**の6.2「とても長い間祝祭に飢えていた」という，唯一大学生による「車のない道」の肯定的な意見を記載した新聞記事からもよくわかる。政府は放任の遊び場をつくることによって若者のガス抜きをしようとしたのである。「車のない道」は軍事政権のイメージを変えるために政府が提供した，初めての遊び場だと言われている[29]。

一方，当時梨花女子大学生だったHは「車のない道」に対して否定的な意見を述べている。Hは1984年から1985年まで大学路を拠点に活動するコーラスグループ「サントゥス」に所属していた。「サントゥス」には「歌の愛を植える」というモットーがあり，1980年代当時は「運動〈＝デモ〉よりは健全な音楽公演を通して，社会を明るく明朗に作ろうという努力」を行なってきたという[30]。当時の「サントゥス」は，ソウル大生と梨花女子大生で構成されており，「下心見え見えの出会い」の場でもあったという。彼女は大学の放送部に入部したために「サントゥス」を脱会した。以下の語りはその後「車のない道」へ遊びに行った時の感想である。

> やっぱり歩行者天国でお酒がだめだった。あのせいで地域が乱れた。むしろ歩行者天国をやっている土日は大学路には行かなかった。渋滞するし，危険な場所だった。周りの人からも行かない方がいいと言われていた。それまではエリートの文化で静かだったのに。あれは失敗だった。持っていきかたが悪かった。（H03/6/20）

上記以外にもHは「80～85年までの大学路が良くて，かえって政府が文化を奪ってしまった」，「本当に歩行者天国は失敗だった。それまでは知性のある場所だったのに堕落した」と語っており，「車のない道」が開放される以前に大学路に親しんだ者にとってその変貌は，見るに堪えないものだったのであろう。「エリート文化」という言葉が出たのは，「車のない道」開放以前の大学路のイメージと，Hの家庭及び教育環境が背景にある[31]と考えられ，「大学生と高卒で働いている人たちと文化は違う」とも語っていた。Hは特に「酒」に対して嫌悪感を抱いており，「酒」によって大学路の雰囲気が壊されたのだと考えている。

表6の6.1，6.2，6.4にもHと類似した発言が記載されている。ここで特筆すべきなのは，「車のない道」への否定的意見は韓国においてレベルが高いとされる大学に

表6　大学生による「車のない道」に関する新聞抜粋記事

6.1	『大学路遊び場依然　高校生まで介入　踊り・酒パーティ』 キムミヨン（淑明女大大学院生）すでにソウル東崇洞「大学路」で若者たちが起こした乱雑な行動とケンカが新聞で報道されていた。このようなことは同じ若者として恥ずかしいことでないとは言えない。先週の日曜日夜9時頃，大学路に出てみた。そこは若者たちのための文化と休息の空間ではなく，異常でおかしな服装の高校生たちが大勢出て大騒ぎをする遊び場だった。規制がないわけでもないが，予定された公演ではなく10代たちの踊り・酒パーティは禁止しなければならない。何人かの若者には先導員たちが目をつけたが，それよりは年上の方たちを補導員として配置し文化空間としての秩序を示して学生身分に外れる醜態を働く青少年たちを先導することも一つの方法ではある。化粧室・洗面室とベンチなどを整備し，オートバイや自転車の通行も規制して，本当の文化空間を整えなければならない。（「中央日報」1985年6月10日）
6.2	「アスファルトに座ることができること一つだけをとっても痛快です。」「男の子たちが遊ぶのだけを観ていても楽しいです。」「私たちはとても長い間祝祭に飢えていました。」「暇だから」時々出てくるという明知大電子工学科1学年学生たちの言葉。（「中央日報」1986年10月16日　一部抜粋）
6.3	「単純な楽しみだけの遊びをすることは事実です。しかしそのせいで若者たちの思考方式が刹那的で軽薄になるのは問題です。」梨大生韓銀姫氏（23）。（「中央日報」1986年10月16日　一部抜粋）
6.4	「大学路ですか？中学生たちの遊ぶところでしょ？大学生たちは別に関心がありません。時々来る友達もいますが，デートとかをしに…暇な友達たちはよく来ますよ。」パタンゴル小劇場に演劇を見に来たという高榮範君（25・延大）は話す。「一言で言うと軽薄な遊園地ですよ。」（「中央日報」1986年10月16日　一部抜粋）

通う学生からのものが多く，特に女性が目立つ点である。さらに，1986年10月16日の「中央日報」には「マロニエ公園の傍らで「解放踊り」を踊っていた大学生たちが警察に追い出されていた。『市で不穏な遊びや急進的な行為芸術は統制しています。』」という報道がなされた。「解放踊り」とは，自由への解放を意味するものだと考えられる。「民衆歌謡」や「解放踊り」などが**表3**の「芸術活動要領」に違背するものであったことがわかる。さらに大学路では大学生によるデモも行なわれることがあった。

以上から大学生にとっての「車のない道」は，単に遊びに訪れる場合でも政治的な意味が意識されていたことがわかる。さらに先述の「サントゥス」やIの合コンをしたという語りから，「車のない道」は男女の「出会いの場」であったこともわかる。しかし，同じ大学生の間でも，性別や大学のレベルによって「車のない道」に対する意識の違いが大きく分かれていることがわかった。

5-3　その他青年

今回の聞き取り調査で最も多かったのが，「その他青年」である。彼らは高校卒業以上の年齢に達し，就業者と非就業者に分かたれる。「車のない道」経験者を探すことは困難であったが，彼らに出会えた理由は，彼らが現在も大学路でストリート・ミュージシャンとして活動を行なっていたり，大学路をたまり場にしているからである。

> その頃の韓国社会は男は男，女は女と別々の文化だったんだ。（中略）それまではなくて，大学路ができてからのことだね。男も女も一緒に酒を飲んだよ。それで，出会って付き合う人たちもいましたよ。ケンカもしたし。そういう雰囲気がありました。友達を作りたくて大学路に遊びに来るんですよ。（J03/7/31）

> 友達の話をしたり，人を沢山見れるよね。そこで色んな問題を話したりするんだ。旅行に行ったり，家でのんびりするのが一番落ち着くんだけど，そういう気持ちをほぐせる場所だね，大学路は。男同士で話していろいろ言い合ったり。（J03/7/31）

Jの語りから「車のない道」ができる以前は，男女が気軽に出会える場所がなく，ここが出会いのきっかけとなっていたようだ。Jにとって「車のない道」は青春時代を過ごした場所なのである。「車のない道」には男女の出会いもあるが，それ以上に「男同士」で語りあえたり，悩みを相談できる友達をみつけることのできる場所でもあったようだ。さらにJにとっては「家でのんびりする」ような気持ちになれる，くつろぎの場でもあった。またFは自分の歌を聴いてくれた人から連絡先を教えられても，連絡をしない場合が多かったと語る。大学路は「ここに来れば会えるとわかっている」場所のため，友達同士になってもわざわざ連絡先を教えることはなかったという。

ここで彼らが築いた友好関係や，落ち着くことのできる空間であるという認識は，「車のない道」が閉鎖された以後は隣接するマロニエ公園へと焦点を移し，現在もその意識を継続させていることが，筆者の調査によって明らかになっている[32]。

5-4　演劇人

大学路周辺には小劇場が密集している。演劇関係者のRと演劇脚本家のPは，長い間大学路に関わってきた。以下の引用は，演劇人が「車のない道」への思いを吐露したものである。

> 演劇をしている人はそこ〈大学路〉を使えるように掃除をしたりしました。だからそこ〈「車のない道」〉で遊ばないし，演劇をしている人はお腹が空いている〈経済的な余裕がない〉じゃないですか，芸術をする人はお金がない。そんな人たちは身体を張ってやっているのに遊びませんよ。（中略）演劇をしている人はどれだけ嫌な気分になったか。（R03/8/5）

> 演劇人たちは嫌がってたよ。うるさいし，演劇をする前なのに騒いで遊んで。人が沢山来たから飲食費が上がったし，建物に入るお金も上がったし，演劇のお金も上がった。演劇人はお金がないのにどれだけ苦労したか。（P03/8/8）

「車のない道」は，演劇人にとって否定的なものにならざるを得なかったようである。上記の引用には二つの重要な点がある。

まず第一に，大学路に放置された大量のゴミ[33]を清掃する清掃員はいたものの，演劇人たちも清掃を行なっていたという点である。新聞では，「車のない道」開場10日前後からゴミの問題が報じられる。「車のない道」が開放された当日と翌日の大学路は清掃されていたが，一週間が経った11日夜の様子を，周辺住民は「道がまるでゴミ箱のよう」だったと語っている（「朝鮮日報」85/5/16）。聞き取り対象者からも同様の語りを多数得ている。

第二に，大学路地区全体の飲食等の価格の値上げである。大学路は「車のない道」が開放される以前からも，大学生たちにとって消費物価が高い場所だといわれていた。「車のない道」開放によって大学路への流動人口が増加し，さらに飲食費が高騰したのである。そこで演出家たちは，値下げを求める声明書やキャンペーン実施を

めぐる意見[34]を取り交わしたのだという（「朝鮮日報」87/2/11）。それ以外には大学路でデモが行われることによって，演劇の観客がデモの参加者と間違えられて警察から呼び止められたり，俳優が来場できずに公演が中止されることもあったという（「朝鮮日報」89/3/5）。

他方，「車のない道」で遊んだと語る演劇人もいた。Mは現在演劇俳優協会の部会長で，舞台公演やテレビドラマにも出演しており，数十年間大学路と関わっている。彼は新村の小劇場で演劇をおこなっていたが，ソウル大跡地が分譲されてから大学路に拠点を移したのだという。

> 演劇が終わってから，その時はお金がなかったからお酒を買って「車のない道」に座って演劇の話をしたよ。それとそこで演劇をしたり，パンソリをしたり。プロがやってるんだから，観客が集まってきて，拍手をするんだ。道の公演。そうやって大学路の文化が作られたんだ。（M03/8/7）

Mは「車のない道」の運営に関わったこともあり，「車のない道」に対して肯定的な意見を述べている。「大学路＝道の公演がみられる」という認識が形成されたのも[35]，自分たち演劇人による道の公演があったからだと考えている。Mは「車のない道」を開放する際，反対する周辺飲食店に対し，「車のない道」による集客は経済効果を生む，大学路もパリやブロードウェイを見習うべきだと説得していたという。

演劇人にとって「車のない道」は，一部の演劇人を除いて，遊び場ではなく不要のものであったようだ。大学路を活動拠点としているため，彼らの評価は厳しい。一方「車のない道」は大学路への移動人口を増やす導きの糸になったと評価する者もいる。

5-5　周辺住民

周辺住民たちは「車のない道」をどのように考えていたのであろうか。マロニエ公園の裏には，50年以上の歴史を持つ東崇教会がある。以下は教会の事務員Uによる語りである。

> 若い人が集まって来て，酒は飲むし，うるさいし。若い人には良かっただろうけど，年をとった人やここの地域の人たちは良いとは思わなかったですよ。酒は飲むし，ゴミが一晩で山のようになるし。オートバイに乗る人もいるし。今は随分静かになりましたけど。（U02/8/6）

Uの語りには，これまで様々な人が不快だと語ってきた「酒」「騒音」「ゴミ」「暴走族」全ての単語が包含されている。Uによれば住民たちは「車のない道」の反対を求め，鐘路区庁へ抗議書を提出した。長年大学路に携っているUからは，「車のない道」に対して否定的な意見しか出てこなかった。教会近くに店を構える不動産屋Wによれば，住民の中には通行規制による不便さから引越しをした者もいたようである。一方で，30年間大学路周辺に住んでいるカフェの店長（V03/8/6）は，若い人たちが酒を飲んだり，歌を歌ったり，話し合いをしていた光景を，美しいと語った。

新聞では前夜祭と翌日の二日間で約4万人の市民が大学路に集まり，「車のない道」は成功したと報道された[36]。しかしながら，開放10日前後から1989年の閉鎖までの間，未成年の飲酒，酒気帯びによる喧嘩，ゴミ，騒音，デモなどが問題視され「車のない道」は「狂乱の道」（「中央日報」85/5/15），「乱場場」（「朝鮮日報」85/5/16・18，「中央日報」86/7/28），「乱場場広場」（「朝鮮日報」85/5/16），「乱場場マダン」（「朝鮮日報」85/5/18），「脱線風流」（「朝鮮日報」85/5/18），「道を開けたのに最初に乞食が通る道」（「朝鮮日報」85/6/8）など否定的に報道された。大学路の文化は「自然」発生的ではなく「突然」現れたために混乱を起こした（M03/8/2）のだと語る者もいる。ソウル市と文芸振興院が最も問題視したのが，未成年による飲酒とそれに伴う行動であった。未成年らは朝の4時まで酒を飲んで騒ぎ，酔って半裸で踊ったり放尿をするなどマロニエ公園，ソウル大学校医科大学，放送通信大学内や住宅街の道にも影響を及ぼしていた[37]（「朝鮮日報」85/5/16）。

その例として，放送通信大学では騒音のせいで講義に支障をきたし，暑い日でも窓を閉めて講義を受けていたという（「朝鮮日報」85/5/16）。ソウル大学校医科大学では騒音が問題化し，1985年5月13日，医学学生会がソウル市庁に「キャンパス周辺の遊園地化」について公開抗議書を提出した。「車のない道」は大学の基本的な機能を麻痺させているとし，「大学路でのスピーカー使用と飲酒禁止及びゴーゴー・ディスコとブレイクダンスを禁止しソウル大医大構内への部外者の出入を禁止する」ことを要求した（「中央日報」85/5/15）。ソウル市文化課の担当官は，「大学路開放の基本目的は，ロマンとおしゃれな道をつくろうということだったが，一部の副作用もあることが事実」であり，「これからは地域浄化委員たちを通して秩序を維持し，行事内容も打楽器やスピーカーを使用しない事を限定する」（「朝鮮日報」85/5/16）と返答する一幕もみられた。また朴正瑛[38]の報告によると，「車のない道」には毎週鐘路区庁の職員約40名が秩序補導及び周辺環境整備をしていたが，喧嘩[39]や犯罪[40]も多発した。飲酒・高声放歌・ブレイクダンスを禁止するという表示板は全くその意味をなさなかったという[41]。

5-6 「車のない道」の閉鎖

1989年10月に，大学路が昌慶宮路の拡張工事の際の迂回路として使用されるため，「車のない道」が一時的に閉鎖されることになり，それが「車のない道」が幕を引くきっかけとなった。工事は昌慶宮から恵化洞ロータリー1.06キロメートル区間の4車線道路を6車線にするためである（「中央日報」89/8/30）。ソウル市は中断期間を1年くらいと算段しており，工事が完了すれば再開するという計画を表明していたが，1989年9月に「車のない道」は閉鎖された。新聞記事によれば「車のない道」の閉鎖の理由は工事のためであったが，鐘路区庁での聞き取り[42]の結果，第一の理由は青少年の脱線の場と化したこと，第二はデモ，第三は工事であることが明らかになった。また，1988年10月，鐘路区庁では大学路近隣の住宅，学校，文化団体，事業所など約300名を対象に大学路運営アンケート調査を実施していた。調査の結果，車両統制による交通渋滞と若者の脱線・騒乱行為を理由に「車のない道」の閉鎖を要求する意見が多数出ており，また大学路が政治集会の「メッカ」になったという意見も出ていたとされ，実のところ鐘路区庁では「車のない道」の閉鎖を1年前から検討していたようだ。

6. おわりに

大学路はソウル大の移転後，文芸振興院が参入し，ソウル大が存在していた頃と同じような文化的な雰囲気を保持した「文化芸術の道」を形成し，「車のない道」を開放することになった。大学路はソウルの人々によって「高級文化のまち」として認識されていたため，その期待も大きかった。「車のない道」開放の背景として，政府が軍事政権のイメージアップを図ったことが挙げられる。朴正熙政権下では戒厳令などで若者の自由が抑圧されていたが，全斗煥は同じ軍事政権であっても朴正熙との差別化を目論んだのである。また，当時盛んであった学生運動の沈静化を促すため，遊び場を設けることで若者たちのガス抜きをする目的もあった。加えて，アジア大会やソウルオリンピック開催など国際化の時代に向けて，他国に発信できる韓国文化の場を作りたかったという理由も看過できないだろう。このような背景から，大学路を文化芸術の道，若者の道として形成し，若者やソウルの人々が遊ぶことのできる「車のない道」は開放されたのである。

それでは，「車のない道」に関わった人々がどのようにこの空間を利用し，享受し，意味付けをしていったのかを考察する。「車のない道」は，主に中・高校生，大学生，青年などが訪れていた。「車のない道」をめぐっては様々な意見がみられた。利用者は共通して「車のない道」での飲酒や放歌の経験と，出会いの場としてのイメージを付与してはいるのだが，当時の社会的属性から「車のない道」に対する意味づけの相違を分類することができる。

高校生の場合は，当時は若者のための遊び場がなかったために単に騒ぐことのできる場所が欲しかったという点に留まる。少年たちが何らかの意思を持って「車のない道」を訪れたとは考え難い。しかし，そういった一部の高校生の振る舞いや素行によって，むしろ「車のない道」にあえて出かけない高校生もいたのであり，「車のない道」は高校生が高校生をみるまなざしに応じて「怖い」といった負のイメージがラベリングされてしまうことがあったということが判明した。

大学生にとっての「車のない道」は出会いの場のひとつでもあり，政治的に抑圧された環境から解放される場所になっていたといえる。それはデモという表現方法だけではなく，思い通りの発言をすることや，歌うことでこの空間を解放区として享受していたのだと考えられる。しかし，大学生の間でも「車のない道」に対する考えが乖離していた。「車のない道」の開放を受け入れ，その空間を自らの解放区として利用する大学生がいる一方で，その空間を受け入れられない者もいた。特に女性やレベルの高い大学の大学生にその傾向は強く，彼らはかつての「高級文化のまち」としての大学路のイメージに愛着を持っており，「車のない道」によってそのイメージが色褪せることに苦痛さえ感じていたようである。

青年たちは，恋人や友人をみつける出会いの場やくつろぎの場として「車のない道」の空間を享受していた。しかし，筆者の調査においては大学生と青年の間に共通して付加された「出会いの場」としての意味が分岐していることが明らかになった。大学生は合コンやサークル活動の場として意図的に「車のない道」を選択して集まり，むしろ青年たちは「車のない道」で様々な人と出会うことを求めていたのだ。

演劇人は，ゴミの清掃や飲食費の値上がりに悩まされるなど，「車のない道」の開放によって大学路での活動に支障をきたすこともあり，不快な思いをしていた。一部，「車のない道」で遊んだことのある経験を持つ者にとっては，「車のない道」が否定的な空間にはなっていないようだが，「車のない道」の運営に関わった者とそうでない者の間では意見の相違がみられた。また，演劇人たちは「大学路」の空間イメージよりも「車のない道」が自分たちの演劇活動にどれだけ影響を及ぼすのかが，心配されていたようである。

周辺住民たちは騒音やゴミ，車両通行の不便さなどの問題から，「車のない道」は不要と感じていたようである。しかし，唯一カフェの店長のみが「車のない道」を肯定的に評価したことは重要である。そこから大学路周辺の

居住者と飲食店経営者では，「車のない道」のとらえ方に差があることがわかるからだ。

以上から，「車のない道」に対するソウルの人々の意見は，多種多様かつ一定の乖離がみられることが明らかになった。そこには社会的属性間による意味づけの差異がみられ，たとえ同一属性の内部でさえもその意味の葛藤が生じていた。その意味づけの分水嶺となるのが，旧ソウル大学跡地に形成されていた大学路の高級・文化的なイメージを持ち続け，それにどれだけ愛着を感じているか，ではないかと考える。かつての大学路を利用することがなかった高校生，大学生，青年などは「車のない道」に家庭や学校，会社といった生活レベルの抑圧や政治的な抑圧からの解放区的な性格を読み取った。しかしかつての大学路へ愛着を感じていたり，利用者であったいわば「エリート」にとって，「車のない道」の開放がもたらした大学路の雰囲気とイメージの崩壊は，上記の人々と折りあうことのない関係になってしまっている。

また「車のない道」を管理するソウル市にとっても同様のことがいえないだろうか。「高級文化」のまちのイメージを保持させたまま“若者のための遊び場”をつくったはずであったが，その意図に反する結果が待っていた。管理を行なうことによって次々と崩壊してゆく大学路の空間の雰囲気やイメージに，ソウル市はジレンマを抱えていたはずである。

1980年代という時期に活発に形成された文化空間は，行政によって厳しく管理され市民に与えられるものであった。当時のソウルの文化空間は，行政とソウル市民という対極の間に存在し，行政対ソウル市民，市民の中でも階層やさらには同一属性内でも空間への意味づけをめぐる葛藤が生じていた。そこには，都市空間の重層性が展開されていたことを読み取ることができよう。

（付記）

本稿は2004年に大阪市立大学大学院文学研究科に提出した修士論文の一部を加筆修正したものである。また，本稿の一部は2004年の韓国・朝鮮文化研究会大会で発表した。聞き取り調査においては大変多くの方にお世話になった。記して感謝の意を表したい。

注

1．本稿では文化空間等の利用者としてソウルにいる人々を指す場合，ソウルの人々（ソウルに住んでいる・いない，階層に関わらず様々な人）とソウル市民（自治体の行政管轄区域に住所を持つ人々）に使い分けた。

2．성동규，김성희『시청 앞 서울관장의 이용실태 및 만족도에 관한 연구』서울시정개발연구원　2005（ソンドンギュ，キムソンヒ『市庁前ソウル広場の利用実態及び満足度に関する研究』ソウル市政開発研究院，2005）。

3．성동규，김성희「서울광장 이용에 대한 시민 만족도 및 이미지에 관한 연구―‘시민광장’과‘문화광장’으로서의 인식을 중심으로―」『서울도시연구』第6권 第4호　2005.12　pp191-214（ソンドンギュ，キムソンヒ「ソウル広場利用に対する市民満足度及びイメージに関する研究―‘市民広場’と‘文化広場’としての認識を中心に―」『ソウル都市研究』第6巻第4号，pp191-214，ソウル市政開発研究院，2005. 12）。

4．前掲注3。

5．骨董品や民芸品の商店が並び，伝統文化の道として観光地化されている場所である。

6．日本でいう歩行者天国のことである。以降，本稿では歩行者天国を意味する言葉を，韓国で使用される「車のない道」と表す。

7．최지연，길용현「인사동‘차 없는 거리’에 관한 연구」『관광지리학』第10호　pp93-119　1999（チェジヨン，キルヨンヒョン「仁寺洞‘車のない道’に関する研究」『観光地理学』第10号，pp93-119，1999）。

8．鐘路区庁によると，大学路には明確な範囲が存在するわけではなく，小劇場の配置により大学路という地域の範囲も広がるという。

9．이건용「새로운 음악세대를 기다리며」『月刊文藝振興』8-5-71　韓國文化藝術振興院　1981　pp63-65（イコンヨン「新しい音楽時代を待ちながら」『月刊文藝振興』8-5-71，韓國文化藝術振興院，1981，pp63-65）。

10. 車凡錫「韓国演劇の現状」『月刊韓国文化 5月号』，韓国文化院，pp17-21，1996。

11. 김창남『대중문화의 이해』한울　2003（キムチャンナム『大衆文化の理解』，ハンウル，2003）。

12. 최선중「대학로를 문화 인프라로」『문화예술』한국문화예술진흥원　1997　pp144-152（チェソンジュン「大学路を文化インフラに」『文化芸術』，韓国文化芸術振興院，1997，pp144-152）。

13. 前掲注11。

14. 漢江を境にソウルの北地域を「江北」，南地域を「江南」と言う。

15. 金成洪「ソウルの道と都市文化」『アジア遊学』34，勉誠出版，2001，pp75-78。

16. 김정옥「거리 문화」『한국연극』9-12-89　한국연극협회　1983　pp94-96（キムジョンオク「道の文化」『韓国演劇』9-12-89，韓国演劇協会，1983，pp94-96）。

17. 이중한「서울特別市와 文化政策」『한국연극』12-89　한국연극협회1983　pp99-101（イジュンハン「ソウル特別市と文化政策」『韓国演劇』12-89，韓国演劇協会，1983，pp99-101）。

18. 文芸振興院「'85年度文芸振興基金作業計画」『隔月刊文芸振興』9，韓国文化芸術振興院，1985，pp24-27。

19. 1985年11月からはソウル市から鐘路区庁に運営が移管された。

20. マダンとは庭・広場という意味と，人々が集まって何らかのパフォーマンスを行なっている最中であるという状況を指す言葉である。この場合，人々が集まって様々なパフォーマンスを行なうことのできる空間という意味としてとらえる。

21. 서울特別市『85.5大學路“風流마당”街路藝術祭計劃』同発行，発行年不明（ソウル特別市『'85. 5大学路“風流マダン”街路芸術祭計画』，同発行，発行年不明）。

22. 前掲注21。

23.「朝鮮日報」及び「中央日報」1985年5月11日～1988年11月17日まで調査した結果。

24. 韓国の伝統楽器の演奏形態のこと。

25. 聞き取りから得られた「語り」は本文で引用し，分析する。なお，語りを記述する場合，まれに文脈をとらえやすくするために〈かっこ〉を使用して筆者が補足した部分がある。また，「語

り」の引用には（カッコ）内に表4に記載した調査対象の記号と聞き取り日時を記した。聞き取りは通訳を介さず全て筆者が行ない，翻訳も筆者が行なった。

26.「中央日報」1985年5月15日。

27.「朝鮮日報」1985年5月16日。

28.「朝鮮日報」1985年5月18日。

29. 当時の韓国には若者の遊び場がなく，「車のない道」ができる以前は，若者たちは汝矣島という人工島の広場でローラースケートや自転車に乗って遊んでいたという（F03/8/8）。

30.「サントゥス」は1971年に結成され，元々「サントゥスギターコーラス」として活動を始めた。しかし，時間が経つにつれてギターよりも合唱団の要素が強くなっていったという。「サントゥス」の活動は今でも継続して続いており，現在はソウル大と梨花女子大だけでなくあらゆる大学の学生が集まって活動を行なっている。現在の「サントゥス」のリーダーとは一度大学路で会い調査を依頼した。都合上，今回はＥメールでやりとりを行なった。

31. Ｈの父親はソウル大学出身であるといい，「車のない道」が開放される以前の大学路に愛着があるようである。

32. 2003年現在，彼らはストリート・ミュージシャンやその仲間として現在でもマロニエ公園に集っている。そこでは「車のない道」が開放されていた頃のように酒を飲みながら語り合ったり，友人関係を築いていることが筆者の調査によって明らかになった。

33.「朝鮮日報」1985年5月16日の記事によると，マロニエ公園の中だけでもトラック一台分のゴミが出たと言われている。

34.「朝鮮日報」1987年2月11日によると，大学路周辺の飲食店の茶や飲食の値段が度を越していたという。特にコーヒーの値段は高級ホテルや高級遊興場と同じくらいだと言われていた。

35. 筆者の聞き取り調査の結果，ソウル市民には大学路に行けば道の公演がみられるという認識が形成されていることがわかった。

36. 昼間は子どもたちが手をつないで踊り，20時が過ぎると若者たちが円を作って合唱や歌自慢を行なって楽しんだそうである。（「中央日報」85/5/6），（「朝鮮日報」85/5/16）。

37.「車のない道」での青少年の不健全な行為が報道されたのは，二回目の開放である1985年5月11日のことであった。「中央日報」では「一部青少年たちが深夜酒に酔い，喧嘩をしてめまいを起こしたこともあった」（「中央日報」85/5/13）と報じた。その他には「大学路風流マダンがお目見えして二週間が経った11日午後9時頃，高校生たちだと思われる10代青少年約60名が酒に酔い，二ヶ所で角材と割れた酒瓶を振り，約30分間喧嘩をし，3名が血みどろになるなど大学路は一時恐怖の雰囲気に変わり，風流マダンとして造成されたマロニエ公園と街路の所々では，若い男女たちが半裸体の姿でディスコダンスを踊るので市民たちは眉間にしわを寄せている。また風流マダンが終わった後の午後11時頃からは，酔った一部の若者たちが東崇洞・明倫洞四街など近隣住宅街の路地で大声で歌を歌い，大・小便を見境なく見せ，住民たちがこれらの若者たちを追い出す騒動にまで広がった。道路上では一部市民・学生たちがバーナーで肉を焼き，飯を食べて酒に酔って食器を叩きながら歌場を開いた」（「中央日報」85/5/15）と報道された。

38. 朴正英「문화의 거리 4년을 돌아다보면서」『한국연극』8-59 한국연극협회　1989　pp14-19（朴正英「文化の道4年を振り返りながら」『韓国演劇』8-59，韓国演劇協会，1989，pp14-19）。

39. イユリナ（1989）が行なった東崇アートセンター職員への聞き取りによると「喧嘩が起きると瓶を持って走って行ってその後ろにまた一輩がいる光景は珍しくないこと」だと報告している。

40.「朝鮮日報」1985年7月10日によると1985年7月9日に「車のない道」を訪れていた婦女への集団暴行，近隣中・高校生への恐喝，近隣住宅街からの窃盗を行なっていた組織暴力団に拘束令状が申請された。

41. 이유리나「차 없는 거리의 하루」『한국연극』8-59　한국연극협회　1989　pp20-23（イユリナ「車のない道の一日」『韓国演劇』8-59，韓国演劇協会，1989，pp20-23）。

42. 2003年8月4日，鐘路区庁・文芸振興課への聞き取り。

The Conflicts About the Meaning of a Cultural Space in Seoul, Korea, in the 1980's: A Case Study of - the Street Without Cars - in Daehakro

Sayaka MIZUTANI

In this study, I analyzed how Daehakro (Seoul, Korea) as - the street without cars - has been used in the 1980's and how people have gotten the meaning of that, especially as a cultural space.

It has been popular with youths, like junior high school students, high school students, and university students. There has been a variety of opinions from people concerned with play, as well as citizens who have lived there, about Daehakro as a cultural space for Seoul citizens. The core of the opinions was their attachment for Daehakro, which was on a high level culturally in the old days.

Also, there have been conflicts about the cultural space of Seoul in the 1980's not only between the government and Seoul citizens but also between many groups who have visited there. As a result, it can be said that Daehakro - the street without cars - made conflicts on the meaning of a cultural space in Seoul.

Keywords：Daehakro, Seoul, Cultural space, 1980's, the street without cars, conflicts